

鄧石如における篆書筆法形成の理解への試論 (I)

An essay to understand how Deng Shiru's brushstroke of seal script was formed (I)

遠藤 昌弘

Masahiro Endo

目次

前言

1. 鄧石如の有紀年篆書作品目録 (I)
 2. 鄧石如篆書作品の形態における特徴と偽筆疑義作品について (I)
 3. 鄧石如以前の篆書の概観 (I)
 4. 鄧石如の篆書への諸家の言及 (II)
 5. 鄧石如の人物交流からみた書法の影響 (II)
 6. 鄧石如の有紀年篆書作品からみた書風の変遷 (II)
- 結語 (II)

前言

鄧石如は、乾隆八年 (1743) 安徽省懷寧県 (いまの懷寧県五

横郷白麟村) に生まれる。はじめの名は琰、字を石如といった。のちに仁宗嘉慶帝の即位に際し、五十四歳以後その諱である顛琰を敬避して名を石如、字を頑伯に改めた。別号としては、古浣・長卿・笈遊道人・鐵硯山房・完白山人・完白山民・完白翁などを作品款識に見ることができ。

鄧石如の伝記には、孫雲桂「完白山人伝」・呉育「鄧石如伝」・包世臣「完白山人伝」・方履錢「鄧完白先生墓碑」・李兆洛「石如鄧君墓志銘」などがある。

青年のころより刻印と書売って諸国を漫遊し、四十歳前後には梅鏐の家に寄宿して書を古典臨書によって完成させた。四八歳、北京で劉墉や陸錫熊に賞賛されるが、翁方綱から批判されたことから北京を離れた。五十歳頃には畢沅の招きに応じ、私的な相談役となるものの三年ほどで帰郷した。六十歳のときに包世臣と出会い、嘉慶一〇年 (1805) 六十三歳で亡くなった。

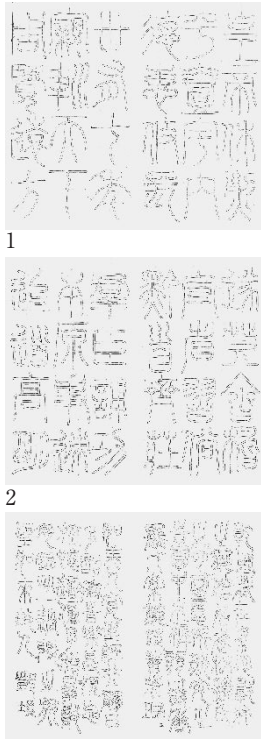
図1 鄧石如三十九歳



図2 鄧石如三十九歳



図3 鄧石如四十四歳



鄧石如は、はじめ篆刻家として生計をたてたが、のちに書家として大成した。現在までに画作の存在は一点も確認されておらず、印と書のみ精力を傾注したといえる。出身は文士の家系とされるが、

祖代に科挙合格者はなく、鄧石如の交流も鄧石如本人と直接に関係を持った人物に限られる。不撓不屈ともいえる強靱な鄧石如の精神性は、そのまま印と書に反映されている。印は近代篆刻の開祖として、また書は金石書法の具現者として、とくに印・篆書・隸書作品には最高の評価が与えられている。のちに鄧の金石書法を継承した、

吳熙載（1799—1870）・趙之謙（1829—1884）・吳昌碩（1844—1927）などに強い影響を与えた。

筆者（遠藤）はこれまでに鄧石如研究を行い、十一件を発表した①。本稿では、鄧石如の有紀年篆書作品を編年して、以下の項目について検討を加えたものである。

第一章「鄧石如の有紀年篆書作品目録」では、有紀年篆書作品を編年整理する。第二章「鄧石如篆書作品の形態における特徴と偽筆疑義作品について」では、有紀年の篆書作品の作品形態を分類整理し、その特徴を検討する。また、偽筆疑義作品について、その概要を述べる。第三章「鄧石如以前の篆書の概観」では、鄧石如以前の篆書の変遷について概観する。第四章「鄧石如の篆書への諸家の言及」では、中国と日本の主な識者の言及を取り上げ、鄧石如の篆書

図4 鄧石如四十八歳

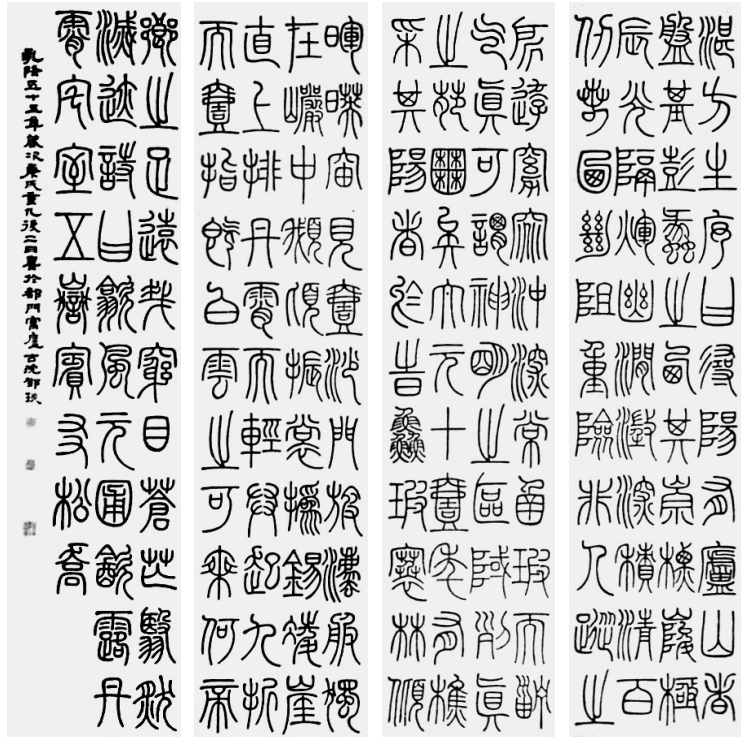
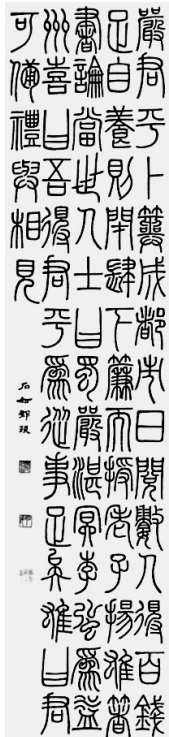


図5 鄧石如四十八歳



をどのように理解してきたかを確認する。第五章「鄧石如の人物交流からみた書法の影響」では、鄧石如自身と後人の言及を取り上げる。第六章「鄧石如の有紀年篆書作品からみた書風の変遷」では、第一章から第五章までの確認と理解をふまえて、鄧石如の有紀年篆書作品からみた書風の変遷を論述する。

本研究は、大東文化大学書道研究所における兼任研究員（平成二十四年）研究計画「鄧石如研究―その芸術の意義」（平成二十四年九月・研究計画書提出／平成二十五年四月・承認済）における個別研究の一項目である。

- ① (1) 鄧石如（有紀年）作品目録『大東書道研究』第七号所収 1999 大東文化大学書道研究所。(2) 鄧石如隸書冊頁『詩経』大雅抑篇について（駒沢女子大学研究紀要）第六号所収 1999 駒沢女子大学。(3) 鄧石如揮毫品における款印と使用時期の変遷について『大東書道研究』第八号所収 2000 大東文化大学書道研究所。
- (4) 鄧石如行書『詩稿冊』について『大東書道研究』第一〇号所収 2002 同前。(5) 鄧石如詩二首を読む―その推敲の変遷と文学について―『大東書道研究』第二号所収 2004 同前。(6) 鄧石如研究資料文献目録（『大東書道研究』第一四号所収 2006 同前）。(7) 鄧石如年譜詳考（『大東書道研究』第一五号所収 2007 同前）。(8) 新資料 鄧石如尺牘「陳寄鶴書」二種について（『大東書

図6 鄧石如四十八歳

周禮寧巨騰御史亦寧子後漢書
發三碑留不慮隱
門辯生粉糝皆十餘年
四九

図7 鄧石如四十八歳

機國記
洪崖濤鼠隱于庚頷上崎
子孫者累數百禩跨躡南川
綿邈遠近曩曠參清日巡
蕃周氣緇上者始見上
系繼見上世呂焉滋茂弗
巾其越孟禧氏見而稱上
世是其稠寧是國地于
律國號曰機奇有寶方
賦視古來衛玠其國與諸
國異氣久乃足夷而獲
氣運困山川而獲城郭
咬盛倉而獲征伏
露而獲耕獲氣水
橫而獲妍粉其居結瑤而構
瓊其尚擷芳而嘯馥其服

道研究』第一六号所収 2008 同前。(9) 新資料 包世臣に宛てた鄧石如尺牘について『大東書道研究』第一七号所収 2009 同前。(10) 鄧石如の篆刻における先人の影響『大東書道研究』第一九号所収 2011 同前。(11) 鄧石如の篆刻における奏刀への試論『大東書道研究』第二一号所収 2013 同前。

1、鄧石如の篆書作品における有紀年作品目録

図書資料・筆者(遠藤)所蔵資料より鄧石如の篆書作品を、年紀・題名・資料の順で記載した。現時点で、真蹟・拓本・摸本を含めて確認できたのは、乾隆四十六年辛丑(1781)三十九歳から、没年の嘉慶十年乙丑(1805)六十三歳の秋までで三十二件であった。

作品は、縮小図版を掲載したが全貌を把握するには不十分である。このため引用資料を付して出典を明記し、作品を確認するための補助とした。また双鉤本(図3・20・27)と一部の拓本(図32)については、冒頭の数頁と落款頁を載せるのみとした。

有紀年作品で篆書をのぞいた篆刻・隸書・楷書・行草書については、それぞれの年紀に作品件数を挙げるにとどめ題名など内容の詳細は省いた。

*

圖11 鄧石如五十四歲（疑義）



圖12 鄧石如五十五歲



圖13 鄧石如五十六歲



圖4 九月十一日。篆書四屏『湛方生序』「湛方生序曰……」

資料…『書道藝術』第十卷（中央公論社）1976・『鄧石如逝生百八十年 包世臣逝生百三十年 記念展觀圖錄』（謙慎書道會）1985

圖5 十月。四體書四屏／篆書幅「嚴君平卜筮……」隸書幅「伯耳學琴於……」楷書幅「矯慎字仲彥……」行書幅「夏統字仲御……」

資料…『鄧石如書法篆刻全集』上卷（天津人民美術出版社）2005

圖6 十一月。四體書四屏圖／篆書幅「周繹字巨勝……」隸書幅「劉慧斐字宣……」楷書幅「周續之字道……」行書幅「祁嘉字孔寶……」

資料…『鄧石如法書選集』（北京・文物出版社）1963・『書道藝術』第十卷（中央公論社）1976・『安徽省博物館、鄧石如の書法とその系譜展圖録』（読売新聞社・謙慎書道會・安徽省博物館）1991

圖7 月不詳。篆書六屏『梅國記』「梅國記洪涯……」

資料…『鄧石如法書選集』（北京・文物出版社）1963

乾隆五十六年辛亥（1791）四十九歲

有紀年作品、篆書2件

圖8 三月。篆書四屏『詩經』南陔篇「南陔孝子相……」

資料…『鄧石如法書選集』（北京・文物出版社）1963・『書道藝術』第十卷（中央公論社）1976

図14 鄧石如五十七歲

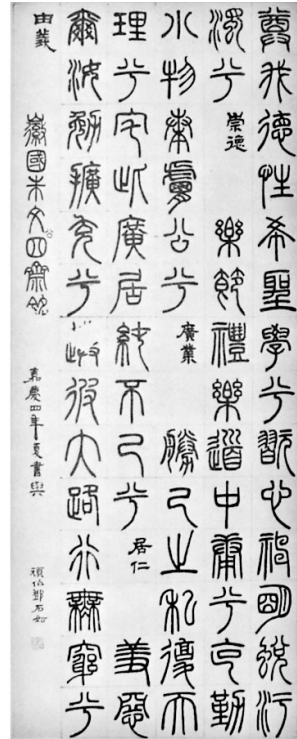


図15 鄧石如五十七歲



図9 三月。篆書四屏『程夫子四箴』「程夫子四箴……」

資料…『鄧石如法書選集』（北京・文物出版社）1963・『書道藝術』第十卷（中央公論社）1976

乾隆五十七年壬子（1792）五十歲

有紀年作品、楷書1件・行草書2件

乾隆五十八年癸丑（1793）五十一歲

有紀年作品、篆書2件・隸書2件・楷書1件・行草書1件（四體書冊1件は各書体に算入、うち行草書尺牘は六十一歳のため除く）

図10 十月十八日。四體書冊頁／篆書冊頁 臨『石鼓文』隸書冊頁

「蓬州登萊閣……」楷書冊頁「冠銘曰居高……」行草書尺牘「五月

□□渡……」

資料…『鄧石如書法篆刻全集』上卷（天津人民美術出版社）2005

乾隆五十九年甲寅（1794）五十二歲

有紀年作品、隸書1件

乾隆六十年乙卯（1795）五十三歲

有紀年作品、行草書1件



図16 鄧石如五十八歲



図17 鄧石如五十八歲



- 嘉慶元年丙辰（1796）五十四歲
有紀年作品、篆書1件・楷書1件
- 圖11 十一月。篆書立幅（拓本）『張子西銘』『乾稱父坤稱……』
資料：遠藤昌弘收藏資料
- 嘉慶二年丁巳（1797）五十五歲
有紀年作品、篆刻2件・篆書1件・隸書2件・楷書1件・行草書3件（四體書冊1件は各書体に算入）
- 圖12 七月十五日。四體書冊頁／篆書「怪石長松嶺……」隸書「少學琴書偶……」楷書「雪齋清境發……」草書「擇故山濱水……」
資料：『書道藝術』第十卷（中央公論社）1976
- 嘉慶三年戊午（1798）五十六歲
有紀年作品、篆書1件・行草書1件
- 圖13 十一月一日。篆書七言聯「山中避客編……」
資料：『鄧石如法書選集』（北京・文物出版社）1963
- 嘉慶四年己未（1799）五十七歲
有紀年作品、篆書2件・隸書1件・楷書1件・行草書1件（四體書冊1件は各書体に算入）

圖18 鄧石如五十八歲



圖14 夏。篆書立幅「徽國朱文公四齋銘」「尊我德性希……」

資料：『鄧石如法書選集』（北京·文物出版社）1963

圖15 十一月。四體書冊頁／篆書「萬綠陰中小……」楷書「司馬溫公云……」隸書「焚香看書人……」行草書「躡蹠畦苑遊……」

資料：『鄧石如法書選集』（北京·文物出版社）1963『書道藝術』第

十卷（中央公論社）1976

嘉慶五年庚申（1800）五十八歲

有紀年作品、篆書3件·行草書1件

圖16 三月。篆書立幅「龍虎之山靈……」

資料：『吉林省博物館所藏 中国明清繪画展圖錄』（中国吉林省博物館）

1987·『鄧石如書法篆刻全集』上卷（天津人民美術出版社）200

5

圖17 四月。篆書橫披『敬止堂』

資料：『中国書法名蹟』（每日新聞社）1979·『鄧石如逝世百八十年

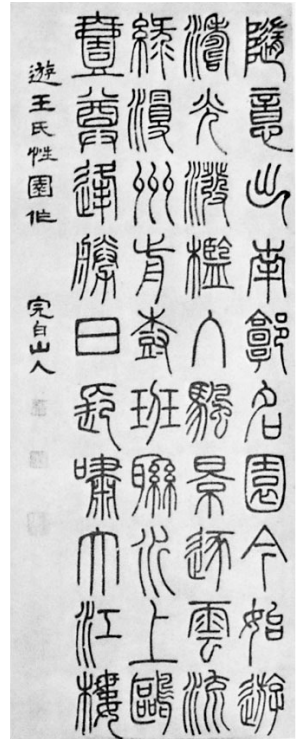
包世臣逝世百三十年 記念展觀圖錄』（謙慎書道会）1985

圖18 四月。篆書五屏『徽國文公四齋之銘』「尊我德性希……」

資料：『金石家書畫集』第一集（上海·西泠印社）1924·『鄧石如法

書選集』（北京·文物出版社）1963·『書道藝術』第十卷（中央公論

図19 鄧石如五十八歳



社) 1976

嘉慶六年辛酉(1801)五十九歳

有紀年作品、篆書2件・隸書6件・楷書1件・行草書1件(四体書四屏1件は各書体に算入)

図19 四月。四体書四屏/篆書「隨意出南郭……」隸書「僕々長安道……」楷書「懷抱屬不展……」草書「楚山靜寥廓……」

資料…『鄧石如法書選集』(北京・文物出版社) 1963

図20 月不詳。篆書冊頁(双鉤)『雪浪齋銘並序』「雪浪齋銘並…

…」

資料…『鄧石如十五種』第三冊(中華書局) 1916

嘉慶七年壬戌(1802)六十歳

有紀年作品、隸書4件・行草書2件

嘉慶八年癸亥(1803)六十一歳

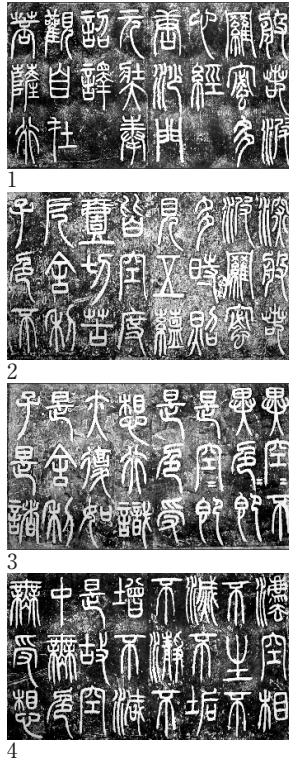
有紀年作品、篆書2件・隸書2件・行草書2件(五十一歳の四体書冊1件のうち行草書尺牘は、六十一歳のため算入している)

図21 一月。篆書立幅(碑刻)『般若波羅蜜多心經』「般若波羅蜜…

図20 鄧石如五十九歳



図21 鄧石如六十一歳



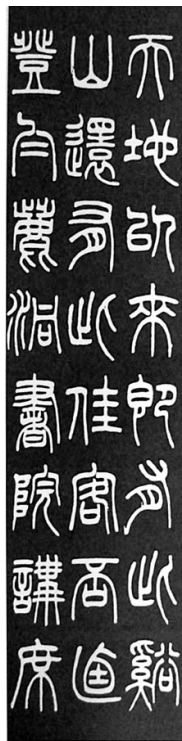


圖22 鄧石如六十一歲（偽筆）



9



10



11



12



5



6



7



8

- 資料：遠藤昌弘收藏資料・『書道グラフ』第381号（近代書道研究所）1988
- 圖22 八月下旬。篆書四屏（拓本）『朱晦翁爲南康守』「朱晦翁爲南……」
- 資料：『鄧石如書法篆刻全集』下卷（天津人民美術出版社）2005。
- 嘉慶九年甲子（1804）六十二歲
- 有紀年作品、篆刻2件・篆書5件・隸書4件・楷書1件・行草書5件
- 圖23 五月六日。篆書六屏『白氏草堂記』「南抵石澗夾……」
- 資料：『書道藝術』第十卷（中央公論社）1976・『鄧石如逝世百八十年 包世臣逝世百三十年 紀念展觀圖錄』（謙慎書道會）1985
- 圖24 十月。篆書立幅『廬山草堂記』「南抵石澗夾……」
- 資料：『鄧石如書法篆刻全集』下卷（天津人民美術出版社）2005
- 圖25 十一月。篆書八屏（拓本）『管子』（弟子職）「弟子職先生……」
- 資料：『鄧石如篆書弟子職』（西泠印社）1986・遠藤昌弘收藏資料
- 圖26 十二月二十二日頃。篆書四言聯「龍跳天門虎……」
- 資料：『鄧石如書法篆刻藝術』（安徽人民美術出版社）1984
- 圖27 十二月二十二日頃。篆書冊頁（雙鈎）節錄『宋武帝與臧燾



圖 23 鄧石如六十二歲

書

資料：『鄧石如篆書十五種』（二）吳育（文明書局）1916

嘉慶十年乙丑（1805）六十三歲

有紀年作品、篆書5件·隸書4件·行草書1件

圖 28 二月十五日。篆書六屏（拓本）程頤『非禮勿言箴』『伊川先生非……』

資料：『書品』第147号（東洋書道協會）1964

圖 29 五月。篆書橫披『念宛齋』

資料：『鄧石如法書選集』（北京·文物出版社）1963·『書道藝術』

第十卷（中央公論社）1976

圖 30 五月五日。篆書八言聯（拓本）「事比於則文……」

資料：『鄧石如書法篆刻全集』下卷（天津人民美術出版社）2005

圖 31 秋。篆書四屏（拓本）『謁余忠宣公墓詩』『浩氣還虛碧……』

資料：『鄧石如書法篆刻全集』下卷（天津人民美術出版社）2005。

圖 32 八月。篆書冊頁（拓本）『張子西銘』『乾稱父坤稱……』

資料：『鄧石如篆書十五種』六（上海·中華書局）1916·『鄧石如書

法篆刻全集』第二卷（安徽美術出版社）1994

賞辨繼爾翳曰月光
不助地外豫層巖積

石巖空奇木異艸蓋
覆莫上緣陰蒙未實

離不知莫名四時
夏

嘉慶甲子蒲節後一日書奉
仲甫先生嘉畫 宛白山民鄧石如

圖24 鄧石如六十二歲（疑義）

南經石澗亦澗有古
松者枯亦僅十尺圍
高不知幾百尺倚柯
覆其上緣陰蒙未實
離不知其名四時
夏

嘉慶甲子小春節綠唐山字堂記
鄧石如

2、鄧石如篆書作品的形態における特徴と偽筆疑義作品について

鄧石如篆書作品の形態における特徴―確認できた鄧石如における有紀年篆書作品三十三件の中には、嘉慶九年甲子（1804）六十二歳にみられるような篆書六屏『白氏草堂記』や篆書八屏（拓本）『管子』（弟子職）のような大作が確認できる。

鄧石如篆書作品について、立幅・対聯・四屏・四体書四屏・四体書冊頁・五屏・六屏・八屏・横披・冊頁・碑刻の形態に分類する。

立幅 真跡5件（内1件疑義）+拓本1件（疑義）、計6件

図1 三十九歳、二月二日。篆書立幅

図2 三十九歳、五月。篆書立幅

図11（疑義） 五十四歳、十一月。篆書立幅（拓本）

図14 五十七歳、夏。篆書立幅

図16 五十八歳、三月。篆書立幅

図24（疑義） 六十二歳、十月。篆書立幅

対幅 真跡2件+拓本1件、計3件

図13 五十六歳、十一月一日。篆書七言聯

図26 六十二歳、十二月二十二日頃。篆書四言聯

图25 鄧石如六十二歲



图30 六十三歲、五月五日。篆書八言聯（拓本）

四屏 真跡3件+拓本2件（內1件偽筆）、計5件

图4 四十八歲、九月十一日。篆書四屏

图8 四十九歲、三月。篆書四屏

图9 四十九歲、三月。篆書四屏

图22（偽筆） 六十一歲、八月下旬。篆書四屏（拓本）

图31 六十三歲、秋。篆書四屏（拓本）

四體書四屏 真跡3件

图5 四十八歲、十月。四體書四屏

图6 四十八歲、十一月。四體書四屏

图19 五十九歲、四月。四體書四屏

四體書冊頁 真跡3件

图10 五十一歲、十月十八日。四體書冊頁

图12 五十五歲、七月十五日。四體書冊頁

图15 五十七歲、十一月。四體書冊頁

五屏 真跡1件



图26 鄧石如六十二歲

图 18 五十八歲、四月。篆書五屏

六屏 真跡2件+拓本1件、計4件

图 7 四十八歲、月不詳。篆書六屏

图 23 六十二歲、五月六日。篆書六屏

图 28 六十三歲、二月十五日。篆書六屏（拓本）

八屏 拓本1件

图 25 六十二歲、十一月。篆書八屏（拓本）

橫披 真跡2件

图 17 五十八歲、四月。篆書橫披『敬止堂』

图 29 六十三歲、五月。篆書橫披『念宛齋』

冊頁 雙鉤3件+拓本1件、計4件

图 3 四十四歲、秋。篆書冊頁（雙鉤）

图 20 五十九歲、月不詳。篆書冊頁（雙鉤）

图 27 六十二歲、十二月二十二日頃。篆書冊頁（雙鉤）

图 32 八月。篆書冊頁（拓本）

図27 鄧石如六十二歳



図29 鄧石如六十三歳



碑刻 拓本1件

図21 六十一歳、一月。篆書碑刻（拓本）

以上の分類から、有紀年作品においては四屏・四体書四屏・五屏・六屏・八屏までの大作と四体書冊頁の精作が十五件を数えた。これは偽筆一件と疑義二件を除いた有紀年作品二十九件中の五割(51.7%)を占めるもので、鄧石如の有紀年の篆書作品の特徴である。また有紀年の立幅・対聯は合わせても九件で、三割(31.0%)である。偽筆疑義作品について―古来より名人には、偽筆はつきものであるが、鄧石如の場合も例外ではない。鄧石如は在世中よりも、後年になって有名になったことから、疑わしいものは少なからず指摘できるが、小稿では従来から知られていて偽筆であり、また近年刊行された鄧石如の全集のなかで掲載されたもので疑義のあるものを確認する。

図23は、西川寧氏が述べているように、

……恐らく作振会時代の初期頃とおもうが、この誰も知る朱拓の方は河井荃廬翁のお説では実は偽作であるという事を山崎節堂さんから伝え聞いて、私は非常に意外に思ったものであった。―中略―朱拓が俗悪なものに見え―中略―朱拓がたまらなくイヤになってきた〔書道〕第五卷第八号 1936) ……と述べている。

図28 鄧石如六十三歳



図23は、古くから知られ、また日本でも少なからず見ることができものである。図版23の前後の作品と見比べてみても文字が楕円形に膨らみ筆画が弛緩していて、鄧石如の筆跡とは異なることが理解できる。まさに河井荃廬氏の指摘は、慧眼であり妥当といえる。

図11は、図32と同文であり、見比べてみると字姿も同じである。両者の落款は異なっており、図11は五十四歳で、図32は上海・中華書局『鄧石如篆書十五種』(1916)に掲載される最晩年の六十三歳の作品で、ほぼ十年間の隔たりがある。図11は、図32に比べて冒頭は同じであるが字数は図32より少ないものである。図32を改変したものと考えられ落款の年代に疑問が残る。

図24は、天津人民美術出版社『鄧石如書法篆刻全集』(2005)に掲載された新出の作品であるが、図23の冒頭三行と末尾三行を合成したもので途中が省略してある。また図23と比較して筆画も細く弱々しさを感じる。また文章を折衷するといった撰文は見えないもので疑問である。

4、鄧石如以前の篆書の概観

篆書は、前二二一年に行われた、秦の始皇帝(前259—前210)の文字統一に始まる。『史記』(秦始皇本紀)によれば、始皇帝は紀元前二二〇年から国内巡幸を行い七つの刻石を建碑し、その揮

図30 鄧石如六十三歳



図31 鄧石如六十三歳



毫にあたったのは丞相の李斯（前284頃—前208）とされる。

この遺例として、現存するものに『泰山刻石』（前219 参考2）

と『瑯琊台刻石』（前219）があるが、ともに残石である。また、

そのほか『嶧山刻石』（前219）『会稽刻石』（前210）などは

復刻が伝わっている。

始皇帝による文字統一は、戦国の七雄のうちの秦を除いた六国の

文字を廃止したもので、篆書以前の文字は「古文」とよんだことか

ら「六国古文の廃止」ともいわれる。また始皇帝が統一した文字は、

戦国の秦の文字をもとにして作ったことから、戦国の秦の文字を

「大家」とよび、統一後のものを「小篆」とよんで区別している。

大家の遺例としては『石鼓文』（戦国・秦、異説あり 参考1）が

ある。

篆書の文字構造は左右相称を原則とし、運筆は点画に肥瘦のない

もので、その厳格は始皇帝の権威をしめすには十分であるが、実用

には不向きなものであった。このため篆書は一般化しないままに儀

礼書体として名残を留めるほどで、漢代になると正書体として隷書

が、補助書体として草書がひろく人々に受け入れられ、篆書は、隸

書碑の『孔宙碑』（164）『西嶽華山廟碑』（165）『韓仁銘』（

175）『張遷碑』（186）などの篆額となって見ることができ

るほどになった。また少数ではあるが篆書碑の『嵩山少室石闕銘』

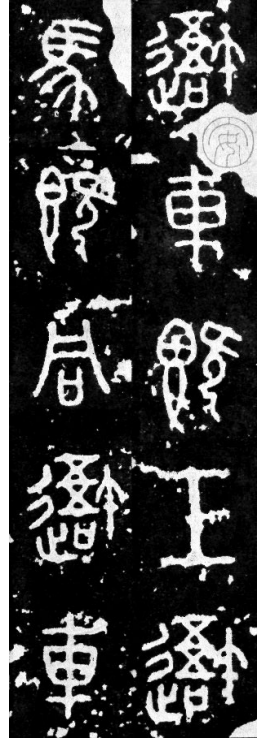


鄧石如六十三歲



- (123) 『嵩山開母廟石闕』(123) 『袁安碑』(92) 『袁敞碑』(117) などが刻されていて、また隸書と篆書が混体した刻石の『祀三公山碑』(117) 『嵩山太室石闕銘』(118) などもあるが、その書流はおおきく衰微した。
- また前漢には許慎(58頃—147頃)『說文解字』(100)がある。内容は、小篆を挙げて解釈を施して文字体系を整理したものであるが、今日見るものは北宋の徐鉉(916—991)・徐鉉(921—975)による校定本である。
- 三国時代以後は、『正始石經』(240—248) 『天發神讖碑』(276) 『封禪国山碑』(276) などの碑刻をみるほどである。
- 楷書や行書が定着するなかで、正書体は隸書から楷書にうつり、補助書体は草書に行書がくわり、楷書・草書・行書が通行書体の主流となった。書聖王羲之(303—361)が登場して以来、書と人物を結び付けて鑑賞の対象となるようになる。
- 唐代の中期に登場した李陽冰(生卒年不詳)は、それまでわずかに見るほどであった篆書を復活させた。この伏流には、『石鼓文』の発見による古代文字への関心や、書の規範とされてきた王羲之への批判、また社会構造の主流が貴族から新興の知識人たちへ移行して、従来の価値観への批判が台頭してきたことがある。文学では李白(701—762)・杜甫(712—770)・韓愈(768—819)

参考1 『石鼓文』部分



参考2 『泰山刻石』部分



参考3 『三墳記』部分



参考4 孫星衍「篆書七言聯」部分



24)の活躍があり、書では顔真卿(709—785)・張旭(生

卒年不詳)・懷素(725頃—785頃)など王羲之を至高の範として尊重しない人々が活躍する。とくに韓愈はじゅうらいの駢儷文を否定して古文復興を唱え、王羲之の書を「俗書」とまでよんで否定した。そうした時代の潮流と相まって李陽冰は顔真卿の石碑に題字を残し、また自身も『城隍廟碑』(759)『三墳記』(767参考3)『般若台題記』(772)などを残した。李斯とともに「二李」と称され、その篆書はとくに「玉箸篆」とよばれる復興の榮譽を謳われた。また李斯の篆書は「秦篆」と称されて区別されるようになる。

宋代になると、復古の精神は学問へと向かうことになる。北宋では『説文解字』研究を進めて現在のテキストとなった徐鉉・徐鍇の活躍があり、また欧陽脩(1107—11073)『集古録跋尾』(1064)や帝室における『宣和博古図』(1107—1110)、また南宋では薛尚功(生卒年不詳)『歴代鐘鼎彝器款識法帖』(出版年不詳)によって、古代文字への関心は「金石学」となってひとつの新世紀を迎えることになる。篆書を能くした人物に郭忠恕(?—977)や夢英(生卒年不詳)がいて、それぞれに特徴をだしているが、おおむね李陽冰を継承したものである。

元代は、モンゴル族による支配と漢族への圧政から、政治学問の

主体であった知識人は存在を失い、文芸は低調であった。書は、趙孟頫（1254—1322）が一代を象徴したが、王羲之書法の墨守一心につとめて、新味といえは章草の流行をみるほどであった。いっぽうで趙孟頫は、印を模刻したことを記述して篆刻の祖とされる。また趙孟頫「楷書玄妙觀重脩三門記」（1302）の篆題は玉箸篆の様子で、やはり伝統を体現した大人であった。

明代は、王冕（1287—1359）が石材に文字を刻したとされるが、実例は見ないようである。この百六十年ほどの文彭（1497—1573）はじっさいに刻印を残して、これ以後の文人に影響を与え、おおくの印人が登場してくる。印の文字は篆書を扱うが、書作品としての篆書はなく、書法としては忘れられた存在であった。趙宦光（1559—1625）はみずから称して「草篆」という篆書の行書のようなものを書いたが、秦篆でも玉箸篆でもない奇態なものであった。

清代は、程邃（1607—1692）を盟主とする「徽派」と、丁敬（1695—1765）を盟主とする「浙派」を形成するほどに印人を輩出し、篆刻は文墨の一端を占めるほどに隆盛したが、篆書を専家とする人物は登場しなかった。

王澐（1668—1739）・洪亮吉（1746—1809）・孫星衍（1753—1818）**参考4**）等によって玉箸篆の再興がな

されるようになる。これらの人物は学者で、考証学・金石学からの研究や、文字学の対象として、篆書を扱ったものである。その用筆は筆先を焼き、また切り揃えたもので、本来の筆としての機能を無くしたものである。それは工芸的な要素の強いのもで、たしかに加工した筆によって筆画の安定は得られるが、書の線としては平板さを免れないものであった。同時期に活躍した印人で、こうした玉箸篆に手を染めるものがいなかったのも、書法として否定的にとらえられていたことが理由であろうと推度される。

こうした状況にあつて、積極的に玉箸篆を吸収したのが鄧石如（1743—1805）であつた。鄧石如が興味あるものに逡巡することなく自己の書法に摂取できた理由は、直接の師系を持たず、ほとんど独学によって書芸を形成したことが最大の理由であろう。

—以下は、次号に掲載—

4. 鄧石如の篆書への諸家の言及
5. 鄧石如の人物交流からみた書法の影響
6. 鄧石如の有紀年篆書作品からみた書風の変遷

結語